信州読書会　YouTubeLive&ツイキャス読書会

課題図書　トルストイ　『戦争と平和　第三部第二篇』

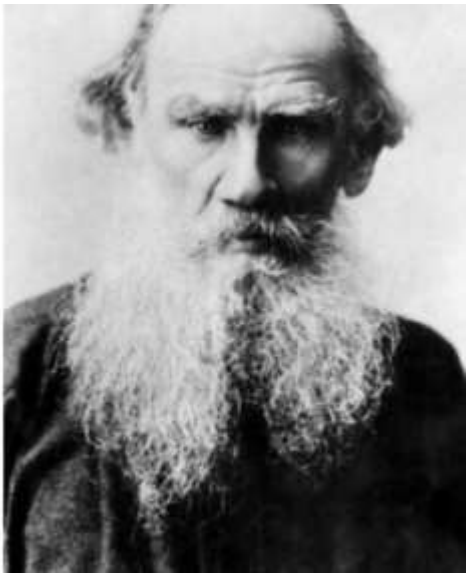
信州読書会では、毎週、YouTubeLive とツイキャスをつかった視聴者参加型の読書会を開催しています。

信州読書会のメルマガ登録者は、課題図書の読書感想文を 800 字で書いていただければ、放送中に紹介します。
（募集要項はメルマガでお伝えします）
また作品に関する質問・感想などは、どなた様も、放送中ツイートいただければ、とりあげます

信州読書会　ツイキャス　[httP://twitcasting.tv/skyPebookclub](http://twitcasting.tv/skyPebookclub)
YouTubeLive　[httPs://www.youtube.com/channel/UCaJK5OLmeEYI97oBQigdcgw](https://www.youtube.com/channel/UCaJK5OLmeEYI97oBQigdcgw)
『信州読書会』 メルマガ登録はこちらから　[httP://bookclub.tokyo/?Page_id=714](http://bookclub.tokyo/?Page_id=714)
今後のツイキャス読書会の予定です。 [httPs://note.com/sbookclub/n/ndcfa96fad284](https://note.com/sbookclub/n/ndcfa96fad284)
『ツイキャス読書会』 音声のバックナンバーです。
[httPs://www.youtube.com/Playlist?list=PLVj9jYKvinCsgP7jtFgzqxea6cgqd7mrf](https://www.youtube.com/Playlist?list=PLVj9jYKvinCsgP7jtFgzqxea6cgqd7mrf)
（各回の感想文は動画の下の説明欄に PDF へのリンクを張ってあります。）

トルストイ

『戦争と平和』



第 347 回の YouTube 読書会の課題図書は、 トルストイ 『戦争と平和　第三部第二篇』です。

読書感想文を提出して下さった皆さんありがとうございます。

作品の解説音声を公開しています。　[トルストイ『戦争と平和』解説]

メルマガ読者　TOTO さん

『戦争と平和』四巻　第三部　第二篇　トルストイ　感想文

苦しみ抜いた挙句、見えてくるものがあるのだと思う。
この篇の登場人物達の苦しみの先にあった深い気づきと理解を感じた。

1812 年、ナポレオンがモスクワに侵攻してくる 8 月（旧暦）、ボロジノの戦いは 26 日に迫った。
死を目前に予感しながら、その戦争の苦しみと、更に個々の人間の内面には幾つもの悲しみを抱えていた。
今、この時点でも多くの人がそうであるように。

マリアは、父、ボルコンスキー老公爵の死の深い悲しみと、領地の農民の反動に苦しみ道を閉ざされていた。
運命のようなニコライ・ロストフの突然の登場に救われた。

「アルパートゥイチは彼の思慮を欠いた行動が良い結果を生みそうだと感じるようになった」（岩波文庫　四巻、P.341
ニコライのこの突発的な行動を咎めることもなく冷静に見守っていた人。
自らの職務を真面目に遂行する、ボルコンスキー老公爵に長年仕えた領地を管理する支配人、アルパートゥイチ。この人の人間性がとても気になった。冷静沈着な老齢の人物が馬に乗っている姿を想像した。

クトゥーゾフの言った、「頼りにな忍耐と時間」（P.366)に通ずる何かを感じる人だった。

「い・と・し・い・子」と死の間際にマリアに残した父の言葉。
父のマリアへの横暴さは、彼の資質でもあったのだと思うのだが、心配する親の意図的な嫌がらせであったのでは⁈、と思うのだ。

何れひとりになるマリアを思い切り突き放し、彼女の何かを覚醒させ、自由にさせるためのきつい「フリ」だったのだと今はそう感じている。
その心の複雑さは読み取れなかったのだが。
ブリエンヌの正体を知っている老公爵。《私はお前（マリア）もフランス女（ブリエンヌ）も必要ない》（P.222)という想像の声は当たっていた。

アウステルリッツ会戦で敗北し左遷され、このボロジノの戦いを前に、また総司令官になったクトゥーゾフもまた気になる存在である。

「明らかにクトゥーゾフは知識も頭脳も軽蔑していて、ことを決する何か別なもの　－　頭脳や知識に左右されない何か別なものを知っていた」（P.361）
かつての敗北のきつい体験が彼に何かを見させていたのだろうと想像した。信仰心と経験が響きあって彼をつくりあげていると感じた。

ピエールに再会したドーロホフ、自らの放埒さの代償を抱えて生きているように感じた。明日死ぬかもしれない今日、過去の過ちをピエールに謝罪した。彼にも何かが見えつつあったのか、ピエールへの接吻が物語っていた。

クトゥーゾフ、アルパートゥイチ、デニーソフ、魅力ある人物像が、またその資質がとても興味深かった。

アンドレイとピエールの再会。過去を知るピエールを忌み嫌うアンドレイ。その気持ちを悟りながらも懸命に軍の内部の状況を質問するピエール。
クトゥーゾフと対立するバルクライ・ド・トゥーリのことや、「明日の運命を決めるのは司令部ではなく、ひとりの兵隊の中にある、気持ち」であり、「勝つと確信している者が勝つ」と、また陣地だの左翼だの右翼だのはくだらなく、「一億もの偶然」にはお遊びでしかない、「自分の身を惜しむことの少ない方が勝つ」と興奮して言い放つアンドレイに共鳴するピエールだった。
「潜熱」という言葉に、アンドレイとの言葉ひとつひとつに、ピエールを悩ませていた問題がその時完全にはっきりした。ピエールは、場違いな戦場へ向かい、その後激しい戦闘の中に身を置いた。

アンドレイは、このボロジノの戦いで負傷した。運ばれたテントで苦しみに耐えた後、「長いこと味わったことのない深い幸せを感じていた」（P.528）
「生きている意識だけ幸せに感じていた」と、死を予感させた。

長靴の中の血のこびりついた切り取られた足、《どうしてあの男がここに》（P.528）、アンドレイの宿敵、泣き喚いているアナトール・クラーギンのものだった。

ラスト近くのこのシーンは衝撃的だった。

この男のために彼はナターシャとの破局を迎えたのだ。
しかしアンドレイは、この宿敵ともいえる男に「感動にみちた憐れみと愛情」を感じ、それが彼の心を幸せであふれさせたのだ。
戦場の危機と苦難が教えてくれた愛。
《同情、同胞への、愛してくれる人たちへの愛、我々を憎む者たちへの愛、敵への愛》（P.530）
神の教え、マリアが教えてくれても理解しなかった愛を、今アンドレイは理解した。
しかしアンドレイは、すでに「死」を意識していた。

苦悩の先に見えたもの。

《何のために、だれのためにおれは殺したり、殺されたりしなければならないのか？　おれはもう嫌だ！》（P.537）
ラストの疲れ果てた兵士の言葉、ここで私は泣いた。

（おわり）

メルマガ読者　シュダイさん

戦争と平和　第三部第二編　読書感想文

世界最強のナポレオン軍の侵略に翻弄される登場人物達。
読書感想文の題材となる箇所はたくさんあったが、やはり主人公の一人であるアンドレイに目がいってしまう。
それにしてもなぜトルストイはアンドレイにこれほどまでに苦難を与えるのであろうか。
その理由の一つが彼を通じて物語に哲学的な深みを与えたかったからではないかと思う。

アウステルリッツの青い空を通じてアンドレイはショウペンハウエルの言うところの意志の世界に触れる。
人生とは人工的な照明のもとで見た幻灯であり、名誉や女への愛などは所詮、儚い虚像に過ぎない。
一方で彼はナターシャという意志の表現者に出会い、一旦は現実での活力を取り戻す。
しかし、アナトールの誘惑に落ちたナターシャに裏切られ、失望し、再び心を閉ざすのであった。

（引用はじめ）
おれは死ぬことはできない、おれは死にたくない、おれは人生を愛している、この草、大地、空気を愛している
（引用終わり）

そんな世界の理を知るアンドレイだったがボロジノの戦いの中で生に執着する。
私にはこれはなかなか不思議に思えた。
しかし、この点にこそショウペンハウエルからニーチェ、観念論から実存主義への西洋哲学の変遷があると考えると妙に腑に落ちた。

ショウペンハウエルの哲学は意志という超越的なものを通して世界の仕組みを説明してくれる。
その理論は明快ではあるものの人生という差し迫った問題に対してはそれほど解決策を示してくれないのが私の印象だ。
一方で『戦争と平和』より後の時代に登場するニーチェの哲学では人生の諸問題に関して幾分かの道筋を与えてくれる。
非常にざっくりした言い方になるが私はニーチェの哲学とは生の肯定と鍛錬にあると思う。
そして彼の哲学では今そこにある生や人生そのものに全力で向き合っているのだ。

例えば『ツァラトラストラはこう言った』第二部同情者たちの章の中には、
隣人を愛するにはまずは自分自身を愛せよという教説がある。
巻末でアンドレイが自身の幸せな少年時代を回想するシーンがあるが、私はこれは彼がこれまでの自分の人生を肯定した瞬間であると解釈した。
故に彼はその直後、最も憎い相手であるアナトールに慈愛の気持ち、隣人愛を抱いたのである。
また、トルストイから幾度も苦難を課せられるアンドレイの姿には超人へと至る永遠回帰を見出すこともできるかもしれない。

観念論を脱し、実存主義を先行したアンドレイ。
彼は人生から何を問われているのであろうか。

その問いに答えるためにも彼はまだボロジノの大地で死ぬわけにはいかないのである。

（おわり）

メルマガ読者　おおい元気ぼっくすさん

「あれ」と「これ」

　戦争モードに入った中で、登場人物の心の動きが興味深く感じる章だった。
　敗北を目の当たりにしたナポレオンの独白、クトゥーゾフと彼を取り巻く将軍たちの言動など注目する場面は数々あったが、個人的には「ボルコンスキー家」にスポットライトを当ててみた。
　最終的にアンドレイ公爵は敵の攻撃に倒れる。かなりの重症である。恐らくこのまま命を落とすのではと思われる。
　そして老公爵は脳卒中を発症し、亡くなってしまう。特に老公爵が倒れてから亡くなるまでのマリアの心の葛藤がとても印象深い。

　（引用はじめ）
彼女はしばしば快方に向かうきざしを見いだしたいという希望をもってではなく、終りに近づくきざしを見いだしたいと願いながら、病気の老父を見まもっていたのだった。（新潮文庫 P.254）
　（引用おわり）

　そして老公爵の束縛からの解放を願う気持ちはどんどん高まる。
　そんなマリアの揺れる心。

　（引用はじめ）
これから、「あれ」がすんだら、どのように自分の生活を組み立てようかという問題が、たえず彼女の頭の中に浮かぶのだった。これは悪魔の誘惑であったし、公爵令嬢マリアはそれを知っていた。「これ」に対抗するただひとつの方法は祈りであることを、彼女は知っていたので、祈ってみた。
　（引用おわり）

　「あれ」と「これ」がマリアの気持ち、葛藤をあらわしている。
　「あれ」とは建前的には「老公爵の葬儀」であり、本音では「束縛からの解放」なのだろう。
また「これ」は文章の流れからは「悪魔の誘惑」となると思うが、本質的には「『束縛からの解放』を願う自分の卑しい心」と読むべきと考える。
　そうした自分自身の嫌悪感・罪悪感を悔い改めるために祈りがあるということなのだろう。

　さらに感動的なのは、亡くなる前に老公爵がマリアを枕元に呼びよせて語る場面。
　「いつも考えていた！　おまえのことを‥‥‥考えていた」
　「一晩じゅうおまえを呼んでいたんだよ‥‥‥」（各 P.259）
　映画ではどういう演出になっているのだろうか。作品を読むだけでも目頭が熱くなるのだから、
　映画はきっと号泣モードになるだろう。

　（おわり）

　おおい元気ぼっくすさんのご著書が発売中です！
『人生 100 年を楽しむために　ワクワクリベンジ読書のすすめ』

メルマガ読者　デュークさん

『戦争と平和』 第三部第二編　感想文

　アンドレイが住民があらかた立ち退いたルイシエゴールイに立ち寄った時に見たスモモを盗む少女たちが、暗い戦時下にあって、唯一明るく初々しく描かれていたのが印象的でした。

　マリヤは父親が亡くなって窮地に立たされるところや、その時白馬に乗った王子様的にニコライが現れて救ってくれるところや、そのニコライに一途な恋をしてしまうところは、前から感じていましたが、容姿があまり良くないという点も含め、やはり末摘花に似ていると思い、ますます好きなキャラクターになりました。
　ニコライはマリヤと自分が結婚すれば、両親も喜ぶし家計も助かる、マリヤも幸せにできるけれど、ただソーニャをどうするかと悩みます。
　私はソーニャも好きなので、どうしたらいいか一緒に悩んでいます。
　この先どのようにそのことが展開していくのかとても気になります。

　ロシアの都市が焦土と化すのは、フランス軍の攻撃が原因で焼かれたという面もありますが、建物や食べ物を残して逃げれば、フランス軍に使われて、敵を生き延びさせてしまうので、住民は辛かったと思うし、軍の作戦とは違ったかもしれないけれど、下手に消火とかせずにそのまま街を見捨てた住民も結果的にロシア軍を援護した形になったのだなと思いました。

　クトゥーゾフは忍耐と時が大事、果報は寝て待てというような姿勢を貫いていて、戦国武将で言うと家康みたいだなと思いました。

　ピエールが人々の顔に見たもの、アンドレイが同僚の心の中に感じるもの、クトゥーゾフが真に戦況を動かす力と信じているものが、ロシアの心意気とでもいうものなのかなあと思いました。

（おわり）

メルマガ読者　さくらさん

『戦争と平和』 第四巻　P.211～最後までの感想文

　四巻の後半から戦争の話が盛りだくさんで読むのが大変でしたが解説していただいて、何とか最後まで読む事ができました。
　今回はアンドレイの名言みたいなこと、考えが印象に残りました。

（引用はじめ）

〈なぜあの人を信じるかといえば、それはあの人がロシア人だからだ、たとえジャンリス夫人の小説を読んだり、フランス語の金言を口にしたりしていても。「なんていうざまにしやがったんだ」と言ったとき、あの人の声がふるえ、「やつらに馬の肉を食わせてやる」と言いながら、すすり泣いたからなのだ〉　P.368

（引用おわり）

　私も解説でおっしゃっていたように、すっかり「ジャンリス夫人の小説」を忘れていたので、それを読んでいたというのが面白かったです。それに栞がわりにナイフというのが男らしい感じがアンバランスで印象に残りました。

　アンドレイは軽く軽蔑した感じで、小説を目にしたときに思ったかもしれないけど、私は何でなんだろうと興味がわきました。
　緊迫した状況におかれてるので、気分転換なのか、それともジャンリス夫人のファンなのか……。

　今回はアンドレイの気持ちや考えが色々あって、ナターシャの事をもしかしたら後悔してるのかな？と思ったりしました。
　まだ憎んでいるかもしれないけど、でも戦場にいて生死を肌で感じていたら、あんな事はささいな事だと思ったりしたかなと思いました。

　私はナターシャが可哀相だなと思っているけど、アンドレイもこの先どうなるのか気になりました。

　色々思う事はあるけど、うまく文章にできませんが、この続きも気になるので頑張って読みたいと思います。

（おわり）

メルマガ読者　まこさん

『戦争と平和　第三部第二篇』読書感想文

今回の範囲は少々読みにくかったです。これまでよりもトルストイの論がはっきり前面に出てきたという印象で、他の歴史解釈に対する批判も強く、得心しつつもところどころついていけなくなったり、断定する部分には疑問を感じたりしながら読み進めました。

うなずけたのは、第一章で、戦争の始まりを個人のそれぞれの目的に応じた行動に理由づけた部分です。全くの自分の想像ですが、以前から、戦地に赴くという非日常においては、日常では得られない高揚感や充実感、または日頃の鬱屈がひっくり返るような気分を味わうようなことがあるのではないかということを思っていました。そして、「人間界のヒエラルキーにおいて高い位置にあればあるほど、ますますその自由の度合いは小さくなる」という考え方にはハッとしました。高い位置にあり、かつ有能で思慮深い人物に自由の度合いが大きくあったらこの世界の在りようは変わるのかな、と思わず夢想してしまいました。

戦場の悲惨な場面を読んで気が滅入ってくると、「歴史の道具」や「必然」「神意」と簡単には受け取ることができず、常に戦争が起きている現在に至るまでどう折り合いをつけるのかがとても難しいと感じます。

このように、無力感にさいなまれながら厭世的な心持ちで読書していたため、ニコライがマリヤを救い出す場面や、死の間際にあるボルコンスキー老公爵とマリヤとのやり取り、アンドレイがスモモを拾う娘たちと出会う場面などを素直に感じて受け取って読むことができず、さらには被弾したアンドレイが足を失ったアナトールに遭遇して愛について思いをめぐらせる場面では鼻白む始末で、自分のやさぐれ具合に驚きました。

そうは言っても、ここまでの読書を通して、登場人物たちがそのときどきの好き嫌いはあっても自分のからだの中にしっかりと存在しており、だからこそ描かれる戦争についても彼らが体験している事と受け取ることができるので、この先も挫折せずに読むことができそうな気がしています。

（おわり）

メルマガ読者　ワカチコさん

『戦争と平和　第三部第二篇』 感想文

ニコライ、お前もか!! いやしかし、ニコライよりもボルコンスキー老公爵の昔の ‘さやあてばなし’ に意表をつかれます。

1812 年 8 月 7 日に老公爵が倒れたあと、二度目の発作を経て亡くなります。死の直前まで、先祖伝来の地が略奪に瀕している認識がなく、屋敷を普請するハイテンションな時と、不眠で鬱々とする時があり、意識蒙昧にして現在と過去が交錯します。

かつて老公爵がプロシア王の異名を持ちながら、在職中に追放され、望んだ通りの人生を送れなかった阻害要因に、国母エカチェリーナ 2 世とその愛人であるポチョムキンやズーボフが含まれていることが示唆され、『早くあの時代に戻りたい』と心身を揺さぶります。〈岩波文庫四巻 P.234-236〉

エカチェリーナ 2 世がフランス流の啓蒙主義をロシアに取り入れながら、フランス革命が起きると自由主義の弾圧に転じ、果たして流行り病のような、うわべの自由主義と、不道徳を助長させる個人主義の端緒として、女帝の虚構性をエレンの人物描写に類似点を見出しながら読めば、ボリスは、お金が無いと言って、よよと泣く母を見て育ち、エレンに纏わりついた後、財産目当ての結婚を選び、出世欲に駆られてゆくのも、若き日のボルコンスキー将軍を想起させることになり、老公爵の食事の相伴に与かれる僅か6人に、ボリス、そしてピエールが居た意味が理解できます。

エレンがピエールに言った『あなたの子どもはできない』〈二巻 P.311〉という言葉の破壊力が、どれほどピエールの心を傷つけ、『怒りの爆発』となったことか。

6 人の子をなしたエカチェリーナ 2 世と、夫である先の皇帝 ‘ピョートル’ 3 世との夫婦関係は早い段階で破綻しており、二夫にまみえずも、正統性もあったもんじゃなく、エカチェリーナ 2 世は、後の祖国戦争で敵側となるポーランドの国王も閨室に入れています。

国家の破壊は戦争という外的脅威によってもたらされるのではなく、秩序をブッ壊すまでに堕落した女、或いは女でなくとも、国の内側から破壊力がブッ放される実態に、トルストイ砲は炸裂しており、国難にあって『全体の成り行きに力を貸さず邪魔をして自分の小さな興味だけにとらわれる』人間をロシア国民は引きずりおろします。ロシアを守る魂、愛国心とは、これ見よがしでも、熱狂でもなく、赤鼻のチモーヒンに宿るような心の底流にある『潜熱』であるということ。

愛国心も自由も認識を誤ると、国運をおびやかす誤謬になるということが、書き込まれています。

アンドレイも父も、人生の盛りに人を愛して、戦地の幕舎で恋敵に遭遇し、自分に無いものを相手は手にしている感情を経験しますが、死を間近にすると、反目する相手にも自分と同じ迷いや欲動が在ることを認め、憐みと愛情にみちた心がこみ上げて、自分自身と和解します。アウステルリッツの空のかなたの偉大なる全と対比して、くすんで粗雑な幻影である現世で、喜び、怒り、憎しみを経験したあと、全てが自分と関係していて、思わず全てがいとおしくなる理性に辿りついた時、神の説く地上の愛が、求めずとも湧き起こってきたように表現されています。これがトルストイの言いたい良心であり理性なのだと、思います。〈P.530〉

スモンレスク街道の小さな池でロシア兵たちが裸の白い体をむき出して沐浴する場面では、太陽である『埃のなかの赤い玉』の下で、兵隊たちが水に触れ、独特の快感を味わい楽しみますが、アンドレイは、ものすごい数の白い肉のほとばしりが血に染まる幻影を感じるのか、周囲すべてのものに対する嫌悪を感じます。〈P.264-266〉死の恐怖と共に多数

性の中で唯一無二であらんとする男性性を巧みに視覚化しており、対して、人間の内にある意志を本質的に感じ取り、神々のしぐさの模倣として表わそうとする知性：ヌースを美しいナターシャに託して描いていると私は思います。

ナターシャが、視たものや素敵に思うことをアンドレイに話そうとしても、うまく言葉にできず、傍点で書かれる所に私は共感します。〈P.445〉

ロシア語には存在しない概念語もあるだろうと思います。だからと言ってジュリーのように、やっぱりフランス語で話さないとねと、うそぶかずに言いよどむナターシャが、ロシアの森の風景や、蜂飼いのおじさんの佇まいの、何を面白がり心を動かされるのか、アンドレイは直感的に理解し合えて心地がよく、ナターシャに惚れてしまったんだなと。ロマンティックな人であることを白状しています。

アンドレイが死を覚悟しながら、ボロジノ戦をどのように考えているかをピエールに話して聴かせる長台詞に私は泣かされましたが、なんで戦場に来てんねんと思われようとも、火薬のにおいの洗礼を浴びて初陣を果たすピエールに慰められます。

（おわり）

メルマガ読者　玉井さん

マトヴェーヴナおばさんのクッキー

という商品を池袋駅北口で路上販売しているのでよかったら買いに来てください。

▼あらすじ（第 3 部第 2 編第 1 章～第 39 章）:
アンドレイの親父が死んで娘マリヤがフランス軍に占領される前に村を出ようとしたけど百姓たちに断固反対されて番頭アルパートゥイチも役立たずだしヤベーよヤベーよと焦ってたらニコライが助けてに来てくれて一安心かと思いきやボロジノの会戦が勃発してピエールが野次馬根性で戦争に参加してアンドレイが負傷してロシア軍はド根性でフランス軍と善戦してナポレオンはこっそり鼻風邪をひいていた……的な話。

▼読書感想文　～　ボロジノ会戦における鼻風邪との因果関係の有無について　～
ここまで優勢だったフランス軍だったが遂にボロジノの会戦で大打撃を受ける。これに関して著者は第 2 編第 28 章から第 29 章にかけて、鼻風邪を引き合いに出しながら、従来の歴史観について次の様に反対意見を述べている。

①フランス軍の敗因は「ナポレオンが鼻風邪を引いたことで指導や命令が冴えなかった」という従来の歴史家の考えは誤りである。こうした考えは、国が一人の人間の意志で形成され、戦争が一人の意志で始まったという発想に端を発するものである。
②一方で、<<世界の諸事件の歩みは神の御意(みこころ)によってあらかじめ定められており、その事件に参加するすべての人々の恣意の総和によって決せられるもの>>　であり、ナポレオンの影響は虚構に過ぎない。
③事実、ロシア兵はナポレオンに殺されたのではなくフランス兵に殺されたのである。これはナポレオンの命令の結果ではなく、<<それが彼ら(私注:フランス兵)に必要だったからである>>。
④会戦の進行を指導したのもナポレオンではない。なぜなら彼の作戦は何一つ実行されず、前線の戦局も知らなかったから。
⑤会戦におけるナポレオンの作戦は他の戦いと比べて劣っておらず、彼はいつも通り任務を果たした。

以上のことから、著者によると鼻風邪とボロジノ会戦は関係無いそうで、まあそうだろうなとは思う。では著者の歴史観についてだが現時点では不明(※エピローグで判明)であるものの、しかし、ここで上記②における「世界の諸事件の歩みは神の御意」および「人々の恣意の総和」という本書の引用部分に注目すると、まず前者の「神の御意」とは、我々人間にとって超越的な事柄であり知り得ないものということができ、これと同様に後者の「恣意の総和」についても、(一人の意志ではなく)各個人が勝手気まぐれに意図した結果、ボロジノで何が起こるかなんてのは人間には分かりようがない。これらは上記③④⑤が裏付けており、ナポレオンの命令を受けた兵士一同が何を思い、そしてどう行動するかなんてのは実際に戦争してみないと分からないのであって、例えば、第 33 章の末文においてフランス軍は、戦火の中で　<<軍紀を失い、偶然の群衆の気分のおもむくままに駆けまわるのであった>>　とあり、これはナポレオンの意志不在、といった著者の意図を思わせる描写である。いずれにしても著者が歴史なるものをどう捉えているのか、それはこの時点でやはり不明ではあるものの、もしかすると「人間同士の勝手な思い込み」とか「知らんもんは知らん」とかそんな事を当時の歴史学に見出していたのかもしれない。

といったことを考えながら、そんなことよりも私は、この先マトヴェーブナおばさんが再登場するのか、それともあの一回で終わりなのか、それはエピローグまで読まないことには誰にも分からないのだと言いたい。

以上

（おわり）

信州読書会　主宰　宮澤さん

ロシア正教は、ロシア国民の関係を樹立し、リアリティを創造している

（引用はじめ）

権力が実現されるのは、ただ言葉と行為とが互いに分裂せず、言葉が空虚でなく、行為が野獣的ではなく、言葉が意図を隠すためではなく、リアリティを暴露するために用いられ、行為が関係を侵し破壊するのではなく、関係を樹立し新しいリアリティを創造するために用いられる場合だけである。

『人間の条件』 ハンナ・アーレント　ちくま学芸文庫　P.322

（引用おわり）

ボロジノの戦いは、兵力の減少から見れば、ロシアの惨敗であった。しかし、激しい砲撃に怯むことなく、ロシア軍は戦場に立ち続け、フランス軍に精神的優越を見せつけた。経験したことのない凄惨な戦場を目の当たりにして、フランス軍は、統制を失い、支離滅裂なおびえた群衆となりかけていた。

この戦いを期に、ナポレオン軍の権力が崩壊していったのである。多量の血を流しながら谷に転げ落ちる獣のように、ナポレオン軍はボロジノからモスクワに侵攻した。しかし、モスクワのクレムリンに入ってもナポレオンは権力を実現できなかった。

クレムリンでのナポレオンの言葉は空虚で、モスクワ市街でのフランス軍の略奪行為は野獣的だった。彼らには、ロシア人との間に新しい関係を樹立し、新しいリアリティを創造することはできなかった。モスクワには火がつけられて燃え盛った。

それはなぜか？

ピエールの指摘した『潜熱（シャルール　ラタント）』がロシアの防壁となったからである。その『潜熱』は、クトゥーゾフが聖像画に跪拝するシーンに最も象徴的に描き出されている。ロシア正教は、ロシア国民の関係を樹立し、リアリティを創造し、防壁を築いたのである。ナターシャの勤行（P.154~155)にもロシア人の『潜熱』が現れている。

フランス革命は、新しい言葉（フランス人権宣言）と新しい政治的結合による権力（ブルジョワの憲法制定権力）を打ち立てた。ナポレオンは、フランス革命によって樹立された新たな関係に、国民皆兵の軍隊を包摂した。さらには、民法を整備して、ブルジョワの財産権を確立し、ブルジョワ市民社会のリアリティを創造した。

ナポレオンが実現した権力空間は、ロシアのボロジノまで及び、そこで、ロシア人の『潜熱』の壁にぶち当たって、崩壊しはじめたのである。ナポレオン戦争を戦う過程の中で、ロシアの民族意識が高まり、ロシアにはロシアの固有の民族意識と宗教意識によって結合された政治的権力の空間が実現されていた。

その政治的権力の空間はボロジノという戦場で、ナポレオン軍とナポレオンという男の正体を暴露し、ヨーロッパで信じられていた彼と彼の軍隊の虚像を打ち砕く凄惨なリアリティ（何万人もの死体　P.539）を見せつけたのである

（おわり）